

熊本県IPM実践指標【カキ】

	管理項目		管理のポイント
	対象	技術	
病害虫・雑草の発生しにくい園地環境の整備	共通	園内清掃	落葉、落果や枯れ枝、せん定くずは園外へ持ち出し処分する。
	共通	剪定	樹冠内部の通風・採光を良好にし、薬剤の付着に死角ができないように整える。 剪定時に枯れ枝や、病斑枝を除去する。
	共通	施肥	窒素過多による軟弱徒長枝は病害が発生しやすいので、適切な肥培管理を行う。完熟堆肥を投入し、樹勢を強化する。
	共通	新梢管理	新梢が遅伸びや二次伸長をしないように摘心や芽かぎ等の管理を行う。
	共通	収穫・輸送	果実の収穫は適期に行い、日中の高温時は避ける。 果実はハサミ傷などがつかないように注意して収穫し、丁寧に取り扱い扱う。
	カメムシ類	防風樹管理	スギ、ヒノキの球果は、幼虫の餌や生息場所となるので、これらを防風樹にしている場合は、管理を徹底し、結実させないか、できるだけ除去する。
	害虫	除草	下草は、ハダニ、カメムシ類の越冬場所や発生源となるので除草する。
	病害	防風ネット等の整備	強風や台風による葉・枝の損傷が病害の発生を助長するので、圃場周辺に防風ネット等を設置する。
防除要否、防除タイミングの判断	共通	園内の病害虫の発生状況の確認	園内を定期的に見回り、病害虫の発生状況を観察する。
	共通	地域内の病害虫の発生状況の確認	周辺圃場の病害虫の発生状況について生産農家間で観察し、情報交換を行う。
	共通（果樹カメムシ類）	病害虫発生予察情報の確認	県病害虫防除所などが発表する病害虫発生予察情報を入手する。（特に、果樹カメムシ類の発生情報に注意する。）
	共通	気象情報の確認	降雨予想や台風情報などの気象情報をこまめに入手する。
	害虫	土着天敵類の確認	園内に発生する天敵類を観察する（コナカイガラムシ類の土着天敵である寄生蜂類など）。
物理的防除	炭疽病	越冬伝染源および発病部除去	せん定時に発病枝をせん除し、生育期間中の発病枝や発病果実は園外に持ち出し、処分する。軟弱な徒長枝に発病が多いため、適正な肥培管理を行う。
	うどんこ病	落葉処理および粗皮剥ぎ	落葉上の胞子が翌年の伝染源になるので、落葉は園外に持ち出し処分する。
	落葉病（角斑落葉病、円星落葉病）	落葉処理	落葉上の胞子が翌年の伝染源になるので、落葉は園外に持ち出し処分する。
	灰色かび病	発病した花卉および葉の除去・葉の損傷防止	発病した花卉および葉は早急に除去する。葉が傷つくと発病が除等されるので、防風対策を講じ、葉の損傷を防ぐ。
	ヤガ類、カメムシ類	袋かけ	袋かけ栽培を行う。
	カキクダアザミウマ	被害葉のせん除	摘蕾・摘果時に被害葉をせん除する。
	コナカイガラムシ類、カキノヘタムシガ、クロフタモンマダマイガ	粗皮削り	冬期に粗皮削りを行い、越冬密度を抑える。
	コナカイガラムシ類、カキノヘタムシガ	バンド誘殺	収穫後、樹幹部に誘殺バンドを巻きつけ、剪定時に取り外して処分する。
	ヤガ類、カメムシ類	黄色蛍光灯の利用	果実成熟期頃から黄色蛍光灯を点灯する。（クサギカメムシやツヤアオカメムシに対しては忌避効果がないので、飛来主要種がチャバネアオカメムシではない地域では注意する。）

	管理項目		管理のポイント
	対象	技術	
化学的 防除	農薬の使用	適正な散布方法、散布量の遵守	農薬容器に記載されている登録内容（作物名、病害虫名、散布濃度、収穫前日数、使用回数など）を遵守し、適切な散布方法、散布量で防除を行う。
		農薬飛散防止対策	対象外作物への飛散防止のため、散布時期として無風～弱風時を選ぶ。また、スピードスプレーの使用時には、送風量を少なくしたり、不必要なノズルを止めるなどの処置を講じる。
		薬剤抵抗性発達の回避	薬剤抵抗性発達を回避するため、特定の系統のみの農薬を繰り返し使用せず、ローテーション散布を行う。
	害虫	選択性農薬の使用	土着天敵に影響の少ない剤を選択する。
	病害	予防散布の実施	樹体の生育相や気象情報をもとに、各病害の発生時期を考慮して感染、発病前に予防的に薬剤散布を実施する。
その他	作業日誌の記録		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、散布した農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法などIPMIに係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。
	講習会・研修会等への参加		地元農協や県が開催する病害虫防除講習会やIPM研修会等に参加する。